

しんぱん

しどうようもんしゅう

新版 指導要文集

だいいつしよう

しんじん

きほん

第一章 信心の基本

くどく

功德

「もし惱乱する者は頭七分に破れ、供養することあらん
者は福十号に過ぐ」

(012 四信五品抄)

功德 270 ページー8行)

「もし正法を誹謗する者は頭が七つに破れ、反対に法華経に
供養する者は十号（十種の仏の尊称）をそなえた仏にまさる
功德福運に恵まれるのである」

國中の疫病は「頭七分に破る」なり。
惟うに、我が門人等は「福十号に過ぐ」
罰をもつて徳を
疑いなきものなり。

(012 四信五品抄)

功徳
270 ページー12行

せんなんし もう

なん

きょう

しん

しかれば、善男子と申すは、男この経を信じまいらせて

ちようもん

だいばだつたほど

あくにん

ほとけ

成

聴聞するならば、提婆達多程の悪人だにも仏になる。ま

まつだい

ひと

じゅうざい

たぶん

じゅうあく

過

して末代の人は、たとい重罪なりとも、多分は十惡をす

ふか

たも

たてまつ

ひと

ほとけ

ぎず。まして深く持ち奉る人、仏にならざるべきや。

(016 主師親御書)

くどく

功德
323 ページー9行)

しゃばせかい にこんとくどう くに いぜん もう
この娑婆世界は耳根得道の國なり。以前に申すごとく、
「當に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に
ひやつかいせんによ さんぜんせけん おさ いわ あ ゆえ
百界千如・三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これ
みみ ふ いつさいしゅじょう くどく しづじょう
を耳に触るる一切衆生は功德を得る衆生なり。
いちねんさんぜんほうもん

(020 一念三千法門)

くどく
功德 363 ページー1行)

しゃばせかい げんじつしゃかい
この娑婆世界（現実社会）は、耳で仏法を聞いて成仏する國土
まえ の みみ ぶっぽう き じょうぶつ こくど
なのです。前にも述べたように「當に知るべし、身土は一念三千な
ることを」といつて、法華経はあらゆる衆生に身に百界、千如、
ほけきょう しづじょう み ひやつかい せんによ

さんせんせけん

いみあき

ほうもん

三千世間をおさめるとの意味を明らかにしているので、この法門を
耳にしたすべての人びとは、からず功徳を得るのである。

みみ

ひと

くどく

え

いちねんしんげ
「一念信解」

くどく ごはらみつ ぎょう こ
の功德は五波羅蜜の行に越え、「五十展轉」

すいき
隨喜

はちじゅうねん

ふせ すぐ

の隨喜は八十年の布施に勝れたり。

(030 持妙法華問答抄)

くどく
功德 515 ページー2行

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、
生死の闇を照らし晴らして、涅槃の智火明了なり。

(095 御義口伝)

功德 987 ページー6行

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と信受・領納する故に、「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自ずから得たり）」の大宝珠を得るなり。

（095 御義口伝

功徳 1012 ページー 5 行)

いま日蓮とその門下が、御本尊にむかつて南無妙法蓮華経を唱えることが成仏の根本であると信じ納得することは、法華経信解品に「無上の宝珠、求めざるに自ずから得たり」とある、その大宝珠を得たことになるのです。

ほうじゅ

さんぜ

しょぶつ

まんぎょうまんぜん

しょはらみつ

たから

「宝聚」

さんぜ
しょぶつ
まんぎょうまんぜん
しょはらみつ
たから

あつ
なんみょうほうれんげきよう
むじょうほうじゅ
しんろう

な

ふぐじとく

な

聚めたる南無妙法蓮華経なり。この無上宝聚を、辛労も無く行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」とは、これなり。

(095 御義口伝)

おんぎくでん

くどく
1014 ページー10行

功徳

されば、妙法の大良薬を服する者は、貪・瞋・癡の三毒
の煩惱の病患を除くなり。

(095 御義口伝)

功德
1052
ページー17行

くどく

ろつこんしようじょう

かほう

せん

「功徳」とは、「六根清淨」の果報なり。詮ずるとこ

いま

にちれんら
たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

ろ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者

ろつこんしようじょう

みようほうれんげきよう

ほつし

な

は、「六根清淨」なり。されば、妙法蓮華経の法師と成

おお

さいわ

あ

つて大いなる徳い有るなり。「功」も幸いといふことな

あく

めつ

く

い

ぜん

しおう

り。または、惡を滅するを「功」と云い、善を生ずるを

とく

い

くどく

「徳」と云うなり。「功徳」とは、即身成仏なり。また

ろつこんしようじょう

「六根清淨」なり。

おんぎくでん

(095 御義口伝)

くどく

1062

ページー10行

功德とは六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）にそなわった煩惱が
払い落されて清らかになつた姿です。結局、日蓮とその門下が、
南無妙法蓮華経と唱えれば六根清淨となるのです。したがつ
て、妙法蓮華経の法（御本尊）を自行化他に行ずるところの師
となつて大きな功德があるので。功德の「功」とは幸いといふこ
とです。または惡を滅することを「功」といい、善を生じることを
「徳」というのです。最高の功德とは即身成仏であり、また六根
清淨なのです。

いわゆる、南無妙法蓮華経と唱え奉るは、即ち
「自在」なり。

(095 御義口伝)

おんぎくでん

功徳
1097
ページー17行

くどく

なんみょうほうれんげきょう

とな

たてまつ

すなわ

ほけきよう いちもんいっく
法華經は一文一句なれども耳にふるる者は既に仏になるべき

(104 四恩抄)

みみ 觸 もの すで ほとけ 成
功徳くどく 1213 ページー11行

されば、鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治むる者は他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華経を持つ者は必ず成仏し候

(107種々御振舞御書

功德
1246 ページー16行)

たび
たいかい
潮
み
つき
まん

この度は、大海のしおの満つるがごとく、月の満ずるがごとく、福きたり、命ながく、後生は靈山とおぼしめせ。

ふく 来
いのち 長
ごしよう りょうぜん
思

(117 真間釈迦仏御供養逐状

功德
1274
ページー
13行

1274

たとい科有る者も三宝を信ぜば大難を脱れんか。

(136 道場神守護事)

功德
1321
ページ
10行

いかにして 候やらん、彼らよりもすくなくやみすくな
く死に候は、不思議におぼえ候。人のすくなき故か、
また御信心の強盛なるか。

(139 治病大小権実違目

功徳 1331 ページー 16 行)

しょうなわしゅ もう ひと らぎょう ひやくしぶつ きぬ
商那和修と申せし人は、裸形なりし辟支仏に衣をまいらせ
て、世々生々に衣服身に隨う。

(154)

太田殿女房御返事 (八寒地獄の事)

功德 1370 ページー 5 行

「讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く」
ほ もの ふく あんみよう つ そし もの つみ むけん ひら

(162 曽谷入道殿許御書)

功德
1409
ページー12行

そやにゅうどうどのもとごしょ

ほど たつと きょうしゅしゃくそん いつときふたとき いちにちふつか
これ程に貴き教主釈尊を、一時二時ならず一日一日な
らば一劫が間、掌を合わせ、両眼を仏の御顔にあ
て、頭を低れて、他事を捨てて、頭の火を消さんと欲す
るがごとく、渴して水をおもい飢えて食を思うがごとく、
間無く供養し奉る功德よりも、戯論に一言、継母の継子
をほむるがごとく、心ざしなくとも、末代の法華経の
行者を讃め供養せん功德は、彼の三業相応の信心にて
一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すべ
しと説き給いて候。

164
法蓮抄
ほうれんじょう

功徳
くどく
1418
ヘージー行(一)

いんとく

ようほう

「陰徳あれば陽報あり」

いんとくようほうごしょ

(217 陰徳陽報御書)

くどく

1613 ページー2行

いんとく

ぜんこう

いんとく

陰徳(かくれた善行)

があるならば、

陽報

(はつきり現れる善

あらわ

よ

い 報 い) が あ り ま す。

いくそばくぞ御内の人々そねみ候らんに、度々の仰せを

返

みこころ

違

たま

かえし、よりよりの御心にたがわせ給えば、いくそばくの

謙

言

そうろう

たびたび

ごしょりよう

返

いま

ざんげんこそ候らんに、度々の御所領をかえして、今ま

しょりょうたま

たも

うんぬん

ほど

ふしぎ

そうちら

た所領給わらせ給うと云々。これ程の不思議は候わず。

いんとく

ようほう

これひとえに、「陰徳あれば陽報あり」とは、これなり

しじょうきんごどのごへんじ

げんおんりゅうちょう

こと

(218) 四条金吾殿御返事 (源遠流長の事)

功德^{くどく} 1614 ページー 15 行

しょうぞう やく え ひとびと けんやく
正像に益を得し人々は顕益なるべし、在世結縁の熟せる
ゆえ いま まつぼう はじ げしゅ
故に。今、末法には初めて下種す。冥益なるべし。

(239 教行証御書)

ざいせけちえん じゅく
功徳 みょうやく
1669 きょうぎょうしようじょ
ページー 6 行

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功德すら申すばかりなし。いわんや、日本国的一切衆生の眼をあけて候わん功德をや。いかにいわんや、一闇浮提・四天下の人の眼のしいたるをあけて候わんをや。

法華経の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義を解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。

法華経を持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて候。

功徳

く
ビ
く

1691

ヘ

一

ジ

一

12

行

(

國中の諸人、一人一人、乃至千万億の人、題目を唱うる
ならば、存外に功德身にあつまらせ給うべし。その功德
は、大海の露をあつめ、須弥山の微塵をつむがごとし。

(251 妙密上人御消息)

功德 1712 ページー11行

こがね

焼

いろ 勝

つるぎ

研

と

金はやけばいよいよ色まさり、剣はとげばいよいよ利く

ほけきよう

くどく

讀

なる。法華経の功德は、ほむればいよいよ功德まさる。

みょうみつしょうにんごしうそく

(251) 妙密上人御消息

くどく

功德 1713 ページー1行

こがね

や

きた

いろ

つるぎ

金は焼いて鍛えれば、いよいよ色がよくなり、剣はとげばいよ

おな

ほけきよう

くどく

さんたん

いよく切れるようになります。同じように法華経の功德は讃嘆すればするほどますます勝っていくのです。

き

すぐ

ろうやく

たも

によにんとう

しにん

されば、この良薬を持たん女人等をば、この四人の

だいぼさつ

ぜんごそう

によにん立たま

によにん立たま

だいぼさつ

ぜんごそう

によにん立たま

によにん立たま

この大菩薩、前後左右に立ちそいて、この女人たたせ給えば、
この大菩薩も立たせ給う。乃至、この女人道を行く時は、

ぼさつ

みち

い

たも

たと

影

み

みず

うお

この菩薩も道を行き給う。譬えば、かげと身と、水と魚
と、声とひびきと、月と光とのごとし。

みようほうまんだらくようじ

(261) 妙法曼陀羅供養事

くどく

1728

ページー3行

功徳

ほけきょう くよう ひと じっぽう ぶつぼさつ くよう くどく おな
法華經を供養する人は、十方の仏菩薩を供養する功德と同
じきなり。十方の諸仏は妙の一宇より生じ給える故なり。

(266 千日尼御前御返事 (雷門鼓御書)

功徳 1745 ページー 5 行)

にちれん くよう にちれん でしだんな にちれん たも
日蓮を供養し、また日蓮が弟子檀那となり給うこと、その
くどく ほとけ ちえ 量 つ たも
功德をば仏の智慧にてもはかり尽くし給うべからず。
しょほうじつそうしよう

(280 諸法実相抄)

くどく
1790 ページー7行

隠

しん

頭

とく

「かくれての信あれば、あらわれての徳あるなり」

うえのどのごしようそく

しつくしおん

こと

(305 上野殿御消息 (四徳四恩の事)

功德 1850 ページー13行)

ひょうめん

あらわ

こころ

おうてい

しんじん

とく

め
み

あらわ

たとえば表面に顯れなくても、心の奥底に信心があれば、その徳はからず目に見えて顯れるものであると、いわれています。

しゅみせん

ちか

とり
こんじき

須弥山に近づく鳥は金色となるなり

ほんぞんくようごしょ

(310 本尊供養御書)

功德 1863 ページー3行

しゅみせん

こだい

うちゅうかん

せかい

ちゅうしん

いち

もつと

たか

しゅみせん

こだい

うちゅうかん

せかい

ちゅうしん

いち

もつと

たか

須弥山（古代インドの宇宙観で世界の中心に位置し、最も高いといわれた山に）に近づく鳥は金色に変わつていきます。

ほけきょう たも
法華経を持ちまいらせぬれば、八寒地獄の水にもぬれず、
はちねつじごく たいか や
八熱地獄の大火にも焼けず。法華経の第七に云わく「火も
や あた みず ただよ
焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」等云々。
ほけきょう だいしち い
ひ あた とううんぬん
はんぞんくようごしょ

(310 本尊供養御書)

くどく
功徳 1863 ページー 8 行)

ほけきょう ごほんぞん たも
法華経（御本尊）を持つていたならば八寒地獄の水にもぬれず、
はちねつじごく たいか や
八熱地獄の大火にも焼けることはありません。法華経の第七の巻の
ほけきょう だいしち まき
やくおうほん ひ や

薬王品に「火も焼くことができないし、水も漂わすことができな
い」と説かれています。

ねが

くどく

いつさい

およ

われ

「願わくはこの功德をもつて、あまねく一切に及ぼし、我
らと衆生と、皆共に仏道を成せん」

(326 上野殿御返事 (竜門御書)
功徳 1895.1.13 行)

みなとも
ぶつどう
じょう

うえのどのごへんじ

りゆうもんごしょ

しゃかぶつ

われ むりょう ちんぽう
おくごう あいだくよう

おこくごう

あいだくよう

釈迦仏は「我を無量の珍宝をもつて億劫の間供養せんよ

まつだい ほけきょう ぎょうじや

いちにち と たま そらるう

くどう

くどく

りは、末代の法華経の行者を一日なりとも供養せん功德

ひやくせんまんおくばいす

くどう

は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候

なんじょうどのごへんじ

ほうみょうにんき こと

(340) 南条殿御返事（法妙人貴の事）

功徳 1923. ページー 15 行

しゃくそん

わたし むりょう めず

たから

むげん なが あいだくよう

釈尊は「私を無量の珍しい宝をもつて、無限に長い間供養

まつぼう

ほけきょう ぎょうじや

いちにち

くよう

くどく

するよりも、末法の法華経の行者を一日でも供養する功徳は、

ひやくせんまんおくばい

すぐ

百千万億倍も勝れている」と説かれています。

と

じっぽうさんぜ

しょぶつ

おんてき

ほけきょう

いつく

しん

たとい十方三世の諸仏の怨敵なれども、

法華経の一句を信

しょぶつす

たも

じぬれば、諸仏捨て給うことなし。

(388 治部房御返事)

くどく

功德
2029
ページー8行)

かかる御本尊を供養し 奉り給う女人、現在には 幸いを
まねき、後生には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、
闇に灯のごとく、険難の処に強力を得たるがごとく、
かしこへまわりここへより、日女御前をかこみまぼり給う
べきなり。

回

寄

にちによごぜん

囲

守

たも

(405) 日女御前御返事 (御本尊相貌抄)

功德 2087 ページー 13 行

このような尊い御本尊を供養する女性は、今世には 幸せを招き

まね

ごほんぞん

さゆうぜんご

た

よせ、衆生には、この御本尊が左右前後に立ちそつて、あたかも

やみよ とうか え
闇夜に燈火を得たように、また険難な山路で強力（力の強い
じゅうしや え かなた よ
従者）を得たように、彼方へまわり、ここに寄りそつて、どこにあ
にちによござん と かこ まも
つて日女御前のもわりを取り囲んで守るでしょう。